

第 48 回目 主にあって強くあれ (3)

はじめに

●神が私たちに与えておられる神の武具についての学びを続けたいと思います。私たちがキリストにあって生きる上での戦いがあります。その戦いの相手は人間ではなく、「暗やみを支配する者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです」。目には見えない霊的な存在、すなわちサタン(悪魔)との戦いです。この戦いにおいて、私たちにあるものは何の力もありません。ですから、悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神が私たちに与えて下さっているすべての武具を身に着ける必要があるのです。

●神の武具として挙げられているものは七つあります。

- (1) 真理の帯を腰に締めなさい
- (2) 義の胸当てを着けなさい
- (3) 平和の福音を足にはきなさい
- (4) 信仰の大盾を取りなさい
- (5) 救いのかぶとをかぶりなさい
- (6) 御霊の与える剣—神のことば—を受け取りなさい
- (7) 御霊によって祈りなさい

●七つの神の武具、聖書で「七」という数字は完全を意味する数です。つまり、神の武装で完全武装するようということが命じられています。これらの七つはすべて密接な関係をもっています。七つの武具を身に着けることによって、はじめて私たちは敵の悪魔の策略に対して打ち勝つことができるのです。その最初のリストに挙げられている「**真理の帯**」は神の武具の中でも全体を覆っているものです。前回、「真理とはなにか」ということについて話しました。真理について私たちがどうのこうのと語る前に、イエシュアが真理についてどのように語っているかが重要です。

①「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、・・・あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」
(ヨハネの福音書 8:31~32)

②「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(同、14:6)

③「わたしは真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」(同、18:37~38)

●敵であるサタン(悪魔)は「偽りの父」です。神のことばを疑わせ、キリストの語ったことばを人々が理解できないように覆いをかけます。そうした敵の策略に対して、真理の帯を腰に締めるということは、なにを隠そう、キリストご自身にとどまり、キリストのことばの中にとどまり、キリストの愛の中にとどまることなのです。それは「キリストを着る」ということもできます。この一言で神の武具は一括できるのですが、パウロはそのことをいろいろな武具を挙げることでより分かりやすくしようとしているのです。

1. 神の武具としての「義の胸当て」とは、自己像にかかわる武具

●「胸」と「胴体」とは同義。胴体の中で最も大切な部分は心臓。あるいは、心。そこを守るための神が備えて下さっている神の武具は、「義」(あるいは、「正義」)です。ギリシア語原典では「義」も「正義」も「ディカイオスナー」という同じことばです。「正義」というと、道徳的な意味での善と悪、あるいは不義、不法に対する正義という意味ですが、「義」というのは、本来、道徳的概念ではなく、関係概念を意味することばです。神が私を義とされる、あるいは、私を義と認めてくださるということは、神が私を喜びの対象として受け入れ、愛をもってかかわって下さる関係(立場、状態)にあることを意味します。この「義を胸当て」としない限り、敵に打ち勝つことは到底できません。そのことをこれからお話ししようと思います。

●敵の策略は、神の語られたことばを疑わせたり、全くちがった知識を与えて否定したりします。しかしそれだけではありません。私たちの罪、欠点、弱さ、失敗、不祥事などを取り上げて非難し、神に受け入れられるにふさわしい資格や価値がないことを継続的に訴えます。そのような訴えに私たちが耳を貸しますと(もっとも、敵が自分を訴えているとは思わせないのが敵の巧妙な手口なのですが)、私たちの自己イメージは非常に低いものとなります。そのような低いセルフ・イメージからは良いものが私たちから出てくるのが不可能になります。

●こんな話があります。キリストにあって積極的思考を教えているノーマン・ビンセント・ピール博士のもと、一人の男性が尋ねてきました。その男性は、頭はボサボサ、ひげもそらず、ネクタイもせず、シャツもだらしなく、靴も汚れ、長い間風呂にも入っていなかったのか、匂いを漂わせている状態でやってきました。そしてこう言いました。「私は無能な人間です。何の取り柄もなく、職場を失い、何も持っていない空っぽな人間です。」と。それを聞いた博士(P)はその男(M)に聞きました。

P「あなたには奥さんがいますか。」

M「ええ、いますよ。あまり美人ではありませんが、よく働く妻がおります。」

P「あなたにはお子さんがいますか。」

M「はい、あまりよい教育は受けさせてやれませんが、おります。」

P「では友達は。」

M「ええ、多くはいませんが、親しい友達が2、3人います。」

P「食事はどうですか。」

M「はい、よく食べます。なければ食べませんが、あればよく食べる方です。」

P「よく眠れますか。」

M「はい、床につくとすぐに寝てしまいます。」

P「健康ですか。」

M「今のところ、病気で病院に行かなければということはありません。」

P「そうですか。してみると、あなたは先ほど自分には何も無いとおっしゃっていましたが、多くのものを持っているではありませんか。お金があっても夫婦仲が悪くて離婚する人も多いのに、あなたには愛する奥さんがいる。お金もちで子どもができない夫婦や、養子をもらう人も多いのに、あなたにはお子さんがいる。お金があっても胃が弱いために食べられない人がいるのに、あなたはよく食べておられる。立派な地位にいても、睡眠薬を飲まなければ眠れないという人がい

אגרת שאול אל האפסים

るのに、あなたはすぐに眠ることができるという。なんという祝福でしょう。なぜ、何もないというのですか。自分はダメな人間だ、自信がない、見捨てられた人間だ、なにも持っていないという自己像を持っている限り、あなたには何も良いことが起こるはずはありません。自分はなにもない人ではなくて、持っている人、妻子があり、よく食べ、よく寝て健康であること、私は幸せだというセルフ・イメージを持ってください。」

そう言ってその男性を送り出しました。その男性は、「自分は何もない人間だと思っていたが、こんなにたくさんのもを持っているとは思わなかった。」と言って、すぐに床屋に行って髪を切り、ひげをそってもらい、家に帰ってシャワーを浴び、新しいシャツを着てネクタイを締め、靴も磨くと全くの紳士に大変身しました。そして何か所も回らないうちに新しい職場を見つけてしまいました。そして、その男は博士に感謝の手紙を送りました。博士のことが彼の人生に対する考え方を変え、自画像を変えることで新しい生活がはじまったのです。

●このように、人は実際よりも自分の心に描いている自画像(セルフ・イメージ)に従い、感じ、そして行動するのです。それゆえ、歪んだ自画像をもっていると、生活に失敗をもたらすパーセンテージが大きくなるのです。はじめから自分はだめな人間という敗北的な自画像をもって生きるならば、やがて自分はますます自信のない生き方をするようになるのです。拳句は神様まで捨てるしかなくなるのです。

●敵の策略の目的は、私たちをダメな人間だと思わせ、私たちの自己像を不健全にする(ゆがめる)ためなのです。こうした敵の策略に対して、私たちに与えている神の武具は「義」です。それもキリストにある義です。「義」とは関係概念です。つまり、神がこの私を喜びの対象として受け入れ、愛をもってかかわって下さる関係(立場、状態)にあることを意味します。この「義を胸当て」としない限り、敵に打ち勝つことは到底できません。

2. 義とは、神が私にくださる金メダル

●オリンピックでは、メダル、メダル、メダルの獲得への期待ばかりです。水泳でアテネに続いて北京で金メダルを連覇した北島選手は、その八年前にモントリオールでのオリンピックに出場して四位だったらしいのですが、彼はそのときはオリンピックに出場できただけで喜んでいたので。ところが、日本に帰って来て、空港でメダルを獲得した人はこちら、そうでない方は解散して下さいというのを聞いて、はじめてメダルの重さを感じたと言います。それから彼はメダルにこだわり、練習を続けて、アテネと北京の二連覇、しかもどちらも世界新、オリンピック新を出しての快挙でした。

●なかには、金メダルだけを目標にやってきて、それが取れないで終わった選手も多いようです。金メダル以外はそれほど価値がないように思っている選手が多いようです。ちなみに、金メダルは銀メダルに金メッキしたものだそうです。よく金メダルをもらった選手がメダルを噛んでいる映像を見ますが、昔は、金の含有量を確認するためにしていた慣習らしいのですが、純度の高い金だと歯型がつくのだそうです。それほど金は柔らかいようです。しかし金メダルはメッキなので、噛んでも歯型はつかないそうです。ただ輝きは銀や銅に勝ってすばらしいです。

●ところで、「金メダル」は、最も優秀な成績をあげた者に対して、その栄誉をたたえるために授与されるもの

אגרת שאול אל האפסים

です。最高の栄誉、それが金メダルです。選手たちはその栄誉がほしいために厳しい練習にも耐えてきて戦っているわけです。金メダルは自分には全く関係のない世界、と皆さんは思っているのではないかと思います。しかしそれは違います。私たちも金メダルを手にすることができます。ただしその金メダルは人からのものではありません。神からの金メダル、神からの称賛、神からの栄誉としての金メダルです。

●ローマ人への手紙 3 章 23 節にはこう記されています。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない。」 人からの栄誉(称賛)を自分の努力で勝ち取ることはできても、神からの栄誉(称賛)を自分の努力で勝ち取ることは決してできないという意味です。では、私たちは希望がないではないかとも思いますが、そうではありません。神からの栄誉を勝ち取るためには、キリストに与えられた栄誉を、信仰によって、自分のものとすることができます。それは、努力ではなく、信仰によってのみ与えられる神からの賜物です。

●「義」とはかかわりの概念であり、神とのすばらしい関係を持つことを「義とされる」「義と認められる」という言い方をします。聖書は「義人はいない、ひとりもない」と言います。すべてが神にとって無益なもの。そんな中でただひとり、人として神とのすばろしいかかわりを保ち続けた金メダリストがいたのです。その名はイエシュアです。イエシュアはその生涯を通じて、御父を信頼した方です。十字架という苦しみの極限においても、槍で体を貫かれても、御父に対して信頼を貫いた方でした。それゆえ神は、御子イエシュアを死からよみがえらせ、彼を信じる者にも同じく「義」を与えて下さるのです。「義」とは神とのかかわりにおける金メダルです。最高の栄誉なのです。それを私たちは行いの努力ではなく、信仰によって得ることができるのです。あまりにも簡単に見えるため、馬鹿にして信じてもらえないのですが、真実はそうなのです。むしろ、信じるということ自体、奇跡的なことなのです。

●有名なたとえ話に「放蕩息子のたとえ話」があります。イエシュアはそのたとえ話と同じテーマを持った他の二つのたとえ話もされました。その一つは、「いなくなった一匹の羊を捜すために、残る 99 匹の羊を置いて、見つけるまで捜すという羊飼いの話です。その話のポイントは非常識にあります。「いなくなった一匹を見つけてまで捜し歩かないでしょうか。」(歩かない、歩かない)。さらに、「見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『なくなった羊を見つきましたから、いっしょに喜んで下さい。』と言うでしょう。」(言わない、言わない)。それと同様に、ひとりの罪人が悔い改めるなら、99 人の正しい人に勝る喜びが天にあるのです(???)。

●続いたたとえ話は、銀貨 10 枚を持っている女の人が、そのうちの一枚をなくした話です。

「あかりをつけて、家を掃いて、見つけるまで念入りに探さないでしょうか。」(そこまでして探さない) 見つけたら、また友だちや近所の人々を呼び集めて、「一緒に喜んで下さいというでしょう。」(言わない、言わない)と当然そうしてくれると思っているところが異常です。それと同様に、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。

●ひとりの罪人がキリストを信じ、悔い改めて、神に立ち返るとき、天においては御使いたちに称賛の喜びがわき起こる。その称賛の喜びは罪人を探した者だけでなく、立ち返った者にも与えられるのです。それは、神から与えられる称賛の金メダルと言えないでしょうか。

3. 健全な自己像の確立(キリストにあるアイデンティティの確立)

●なぜこんな話をしたかという、私たちが健全な自己像を持つ必要があるからです。それは義の胸当てを着けることだからです。皆さんに質問しましょう。あなたはいったい誰ですか。何者ですか、と聞かれてどう答えるでしょうか。

●私とその質問に答えることにしましょう。

Q 「あなたはだれですか」

A 「私は、銘形秀則と申します。すでに 64 歳になります。来年から年金生活者です。」

Q 「それはあなたのお名前と年齢ですね。もう一度聞きます。あなたは誰ですか。」

A 「私は空知太栄光キリスト教会の牧師です。もうここで 27 年ほどやっております。

カトリックの神父ではなく、プロテスタントの牧師です。よく神父と間違えられます。最近、自分が牧師に向いているなど感じるようになりました。」

Q 「それはあなたの職業ですよ。私がお尋ねしたいのは、あなたは誰かということです。」

A 「一人の妻をもつ夫です。牧師の働きだけでなく、料理も作ったりしていますよ。」

Q 「それはあなたの趣味のようなものですね。私がお尋ねしたいのはあなたが誰かということです。」

A 「私はどちらかという、結構、一つのことに集中しやすいタイプなんです。そこが良いと自分でも思っているんですけどね。」

Q 「それはあなたの性格ですね。私がお尋ねしたいことはあなたが誰かということです。」

●この会話おかしいですか。おかしいですよ。いいえ。実は、少しもおかしくないのです。この会話で尋ねられているのは、私がどういう者であるかという問いに対して、私が、終始、目に見えるもので私がどういう者かということに答えているという点です。名前とか、年齢とか、職業とか、趣味、性格—これらすべて目に見えるものです。私自身が自分の目で見える範囲で自分を認識しているということが、実は、敵の策略なのです。「私とは誰なのか」・・・その答えを私たちはしばしば外見的な要素で自分を認識しているということです。(身体的、学歴的、社会的、家系などで)

●自己像とは、自分が自分をどのように考えているかということです。その土台は生育史と関係があります。普通、5、6 歳までにほぼ確立されると言われています。重要なことは、人はその自己像に合わせて行動する者だということです。帆船は風で動く船です。風をうまく利用して進んでいきます。私たちの自己像もしばしばこの帆船にたとえることができます。マストに張られた帆は、風によって方向や進む勢いが変わる。肯定的な強い風を受けると、勢いよく全速力で進みますが、それがないと前に進めなくなります。反対に、否定的な風や非難の嵐に会うと、帆は引き裂かれ、時には、マストも折れたりもします。風は、船みずからのものではありません。外からの力です。つまり、人からの評価によって形作られる自己像—そこに敵であるサタンの足場があります。そこにサタンは自らの要塞を築きます。ですから、私たちがそうした自己像を持っている限り、サタンに勝利することはできません。繰り返し、繰り返し、サタンの足場の中で私たちは生きているからです。そこから脱出しなければなりません。そうした人がいます。その人の名は使徒パウロです。彼はこう言っています。

אגרת שאול אל האפסים

私は、人間的な標準(基準)によって人を(自分も含めて)評価しようとは思わない。(彼は人間的な標準でいうならば、だれもが認めるエリートであった)しかし、今やそうした人間的な標準によって自分を評価しようとは思わない。かつては、キリストに対しても人間的な標準を当てはめていたが、もはやそのようなことはしない。(なぜなら)、私には新しい標準を見つけたからである。その標準とは、キリストにあって自分がどういうものであるかということを知ったからである。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。(Ⅱコリント 5:16~17)。

●神が、キリストにある私をどのように見ておられるか、神の視点から見た自分(自己像)を発見することです。これが、聖書の教える健全な自己像です。これは、自己像のコペルニクス的転換です。

●ちなみに、「コペルニクス的転換」とは、2世紀以来信じられてきた「天動説」(地球中心説)に対して、カトリックの司祭であったコペルニクスが16世紀「地動説」(太陽中心説)を唱えたことから、比喩的に、物事の見方が180度変わってしまうことを言います。近年では「パラダイム・シフト」とも言います。

●キリストにある自己像を持つこと、これが「義の胸当てを着ける」ということなのです。